

“妻木(ムキ)”とは

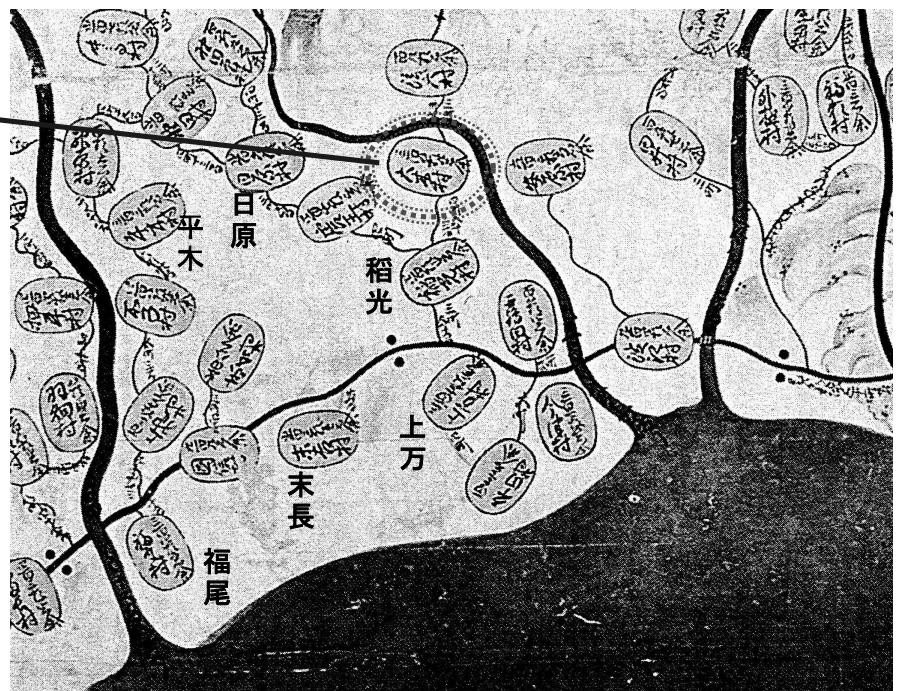
妻木晩田遺跡の東方数百mの地に“玉簾山観音寺”というお寺があります。このお寺の前身は、遺跡を挟んで反対側の妻木地区にあった“夕陽山朝頭妻寺”だそうです。鳥取藩主の池田光仲が、現在の地に新しく寺を建立して祀ることにし、“玉簾山清見寺”と名づけました。明治8年に廃仏毀釈で一旦廃寺同然になった“清見寺”ですが、20年後に滋賀県にある天台宗の“理教寺”をこの寺に移転するという形で復活が叶い、さらに8年後の明治36年に旧中門院大日堂を本堂として大山寺が復活すると、昭和18年に今の“玉簾山観音寺”として大山寺の末寺となりました。

前身の朝頭妻寺のあった妻木地区には縁起書が伝わっており、それによると、“奈良時代に伯耆国汗入郡妻木の民間出身の朝頭磨の娘”が、文武天皇の後となり聖武天皇の生母となる。両親を菩提し天皇制の威を高める大寺院「朝妻寺」が創建され360年間続いたが、平安時代末期に台風で壊されその地に再建されなかった”とあり、さらに現在の玉簾山観音寺に至る前述の紆余曲折が書かれています。縁起書第一節の冒頭部分に、この説話が文武天皇の時代のことと書かれ、“妻木村を昔は、宝代村と申しける”と書かれています。また、第三節の中盤で父母を思う后へ御詠歌の一首給わるとして、“伯耆には 雲のかけはし 大山寺 妻木の里も あるとこそ聞け”と書かれています。

一方、続群書類従に収録された『大山寺縁起』28段に“此山(=大山)の麓の娘が都に出仕して国王(=天皇)の妃に宣された”とあります。続く29段にも、後の父母を弔うために建立した朝妻寺に関連する記事がありますが、いつの天皇なのか、また娘の村の名前には触れられていません。さらには和歌そのものや、歌を詠じたことも書かれておらず、朝妻寺縁起書に比べると非常に淡泊な内容になっております。

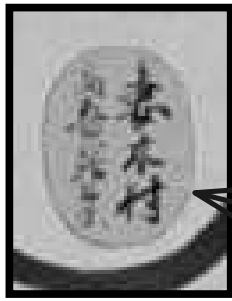
朝妻寺に関する説話は『伯耆民諺記』と『伯耆民談記』にも載っています(以降『民諺記』、『民談記』と略します)。『民諺記』は1742年に伯耆国倉吉詰の鳥取藩士といわれる松岡布政によって著された全20巻の資料です。一方、『民談記』は、1780年頃に鳥取藩家老の鶴殿氏によって『民諺記』を元に改題再編されたものと考えられ、因伯叢書・因伯文庫に所収されている全15巻の資料ですが、何人かの加除改稿によって元の民諺記の形が失われ、構成まで変わっています。

『民諺記』の巻之一、国誌 汗入郡や、『民談記』の巻之一、郡郷 汗入郡の由来譚の中で“老父の代わりに都に上った娘が、光仁天皇に見初められて皇后となり、詠んだ歌から汗入郡の郡名が由来し、帝の勅によって“妻来ノ里”と名付けられ、今は六木(むき)村と言う。”とあります。また、『民諺記』の巻之十二、清見寺の妻木里の部分や、『民談記』の巻之九、清光寺には、同様の経緯に続いて“皇后の死後に菩提寺となる玉簾山清見寺を建立した。”と書かれています。『民諺記』と『民談記』で見出しの寺の名前が異なっていますが、双方とも昔は朝妻寺と称したとあります。

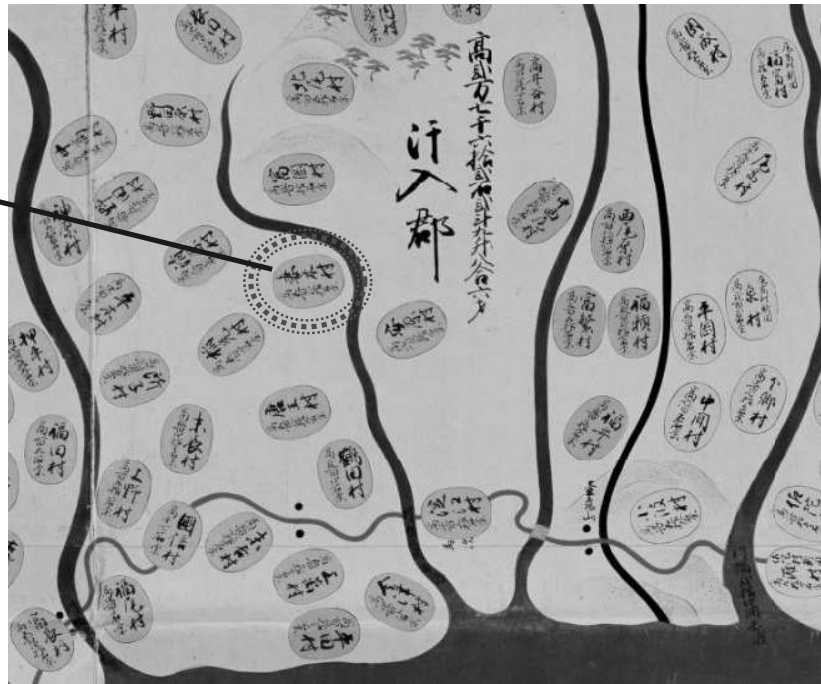


正保国絵図 1644年
全国68ヶ国の軍事と交通関連
の情報が記載され、縮尺も
1/21600に統一される。

正保国絵図 伯耆国 汗入郡部分



天保国絵図 1835年
幕府が主体となって編纂に当たっている江戸幕府最後の国絵図



天保国絵図 伯耆国 汗入郡部分

さらに、『民謡記』の巻之五、伯耆郡郷諸邑之事には、“六木庄 (16ヶ村の一つとして六木村(古妻木))”と書かれ、『民謡記』の巻之一郡郷村名の事には“妻木ノ庄 (16ヶ村の一つとして六木村(古妻木))”と書かれ、読み方がカナでルビまで振られています。

資料間の齟齬は、双方の成立年代に半世紀近くの隔たりがあり、地名の実態が変化して生じたのか、或いは加除改稿中の混乱なのかは分かりませんが、双方が書かれた江戸時代中期には“六木村”が存在し、その由来が“妻木ノ里”にあると認識されていたことが分かります。しかし、どちらにも“妻木ノ里”を詠み込んだ帝の御詠歌は書かれていません。

ところで、江戸幕府は慶長九年、正保元年、元禄十年、天保二年の4回、全国の諸侯に対して国絵図の提出を命じています。1644年に、二番目の正保国絵図(前ページ)の提出を命じています。命令の翌年から順次提出が始まり、慶安初年頃までには全国の国絵図が出揃いましたが、数年後に明暦の大火による江戸城の火災で収納したばかりの国絵図を焼失してしまいました。そのため幕府はその後寛文年間に諸藩へ正保国絵図の再提出を求めています。現在では幕府が収納した正保国絵図の原資料は全く残っていませんが、各藩の控え資料や模写資料が少なからず残っています。寛政期に幕臣の中川忠英が写していた“正保国絵図”の模写本68舗(42ヶ国)が国立公文書館に現存しています。

『近世絵図地図資料集成_第16巻』に収録された正保国絵図には妻木村と読めそうな村がありません。『民謡記』に載っている他の村名と照合すると、‘六木’と読めそうな地名があります。‘六木庄’と記載している『民謡記』より一世紀古い絵図であることを考えると、整合はとれていると思います。

天保国絵図は、時代をおよそ二世紀降った1835年に幕府が主体となって編纂に当たっている江戸幕府最後の国絵図です。この天保国絵図の伯耆国汗入郡には妻木村がはっきり確認できます。‘妻木ノ庄’と記載している『民謡記』より半世紀下って作られた絵地図であることから整合がとれています。

国絵図は、幕府が提出させた資料であり、各藩はそれなりの検証や校正を行っているはずですから、ある程度信用できます。また、民謡記は藩政下で作成された資料であり、地名情報に作為はないと考えられます。これらの文献と絵図の成立順序から、六木村が妻木村に変化したことは確からしく、「妻」の字を「ム」と読むのはここに由来しそうです。しかし、「妻」の字に変わったのが朝妻寺と関係しているのかまでは分かりません。

最初に触れた大山寺縁起は、江戸時代より遥か昔の1398年に前豊前入道了阿によって全10巻の絵巻になっていますが、大山寺の火災で焼失してしまいました。近年、デジタル処理によって復元されていますが、朝妻寺の章段が含まれているかは未確認です。絵巻の絵詞に御詠歌が書かれていたら、変化の由来と言えそうですが…